

梁思成の生涯と北京の都市建設

— ナシヨナリズムと都市を考えるために —

熊田俊郎

一 はじめに

二〇〇八年、北京オリンピックが開催される。一九三六年のベルリンがそうであったように、オリンピックは時としてナシヨナリズムの発揚の場となる。また一九八四年のロサンゼルスオリンピックがそうであったようにコマースリズムの権化ともなる。北京オリンピックはいずれの要素もふんだんに盛り込まれたものになるであろう。中国の都市を一見すると、上海の浦東地区のように未来漫画から抜け出たような奇抜な高層建築の林立がある。上海ほどではないが、北京も従来の観点からすれば奇想天外な建築群が見られる。たとえば近年の長安街を辿ると、日本やアメリカでは考えられない自己主張する巨大建築が軒を並べている。長安街—この通りは解放後貫通したものであるが—はかつての灰色の壁と瓦の統一性を捨て、不統一な建築が一斉に並んでいるという意味で奇妙な統一

がある。その中には屋根をつけたものもある。これを見るとふと奇妙な思いにとらわれる。形はまったく異なるのであるが、かつて「大屋根論争」というものがあつたからである。この大屋根論争の一方の主演（批判の矢面に立つたという意味で）が梁思成という人物である。

梁思成は現代の北京を考える上で欠かせない人物である。梁思成は北京建設に深くかわりながら北京のグランドデザインをした人物とは言えない。むしろ梁思成の提言が斥けられ、命にかかわる批判を受けた。そうして北京の建設が進められた。ただ梁思成をめぐる動きを見ることによって北京におけるナショナルなるものがどういふものかを知ることが出来る、そう思われるのである。

梁思成は伝記的に取り上げるには魅力的な人物である。日本で決してポピュラーな分野でない人物であるが、いくつか梁思成を取り上げたものがある。^(二)しばしば「美貌の才女」と注釈のつく妻の林徽因と二人三脚の活動をする理想の夫婦という取り上げ方も少なくない。^(三)清華大学を取り上げた近著にも同じく取り上げられている。^(三)もつともこの夫婦は特異ともいえる経歴を持つエリート夫婦であり、今日で言えばともに「高幹子弟」でもある。二人を中国近代知識人の典型というなら、それは近代中国社会のある種の典型性を示すものでもある。本稿では梁思成の人生を軸に都市北京を考える要素を抽出したい。

二 梁思成の人生

(一) 父梁啓超と梁思成の幼年時代

梁思成の後妻となった林洙が『困惑の大匠 梁思成』という伝記を書いている。^(四)林洙は同郷（原籍の福建）の林

徽因の伝手で清華大予科（先修班）に学び、梁思成の秘書のような仕事をしている。この伝記は大変面白く、梁思成の資料整理の仕事をしていただけに詳細で客観的なものがある。同書を中心に梁思成の人生を見てみたい。

梁思成は一九〇一（明治三四、光緒二七）年四月二〇日、梁啓超の長男として亡命先の東京で生まれた。^(五)母は梁啓超の正夫人李蕙仙である。梁思成は通常梁啓超の長男と表現されるが『梁啓超年譜長編』には次男と表記され、また兄弟間では「二番目の兄さん」と呼ばれていた。これについては興味深い話が伝えられている。^(六)梁啓超には長女思順が続いて一八九七年に男子が生まれたが、生後二ヶ月ほどで死亡している。梁思成は子供の頃から体が弱く身体的に問題があったようであり、梁啓超夫妻は大変心配した。母の李蕙仙の夢に幼児が現れ、しきりに泣くという。それで夢判断の先生が言うには、夭折した子が家族の中に居場所を必要としているとのことである。そのため家庭内では次男とし、社会的には長男とされる。

梁思成は父・梁啓超の影響を強く受けているので、梁啓超について簡単に見ておこう。^(七)梁啓超（一八七三—一九二九）は広東省新会県の人。清末から民国初期にかけての思想家、政治家、ジャーナリスト、学者である。父祖は地主であるが数ムー（畝）というから小規模で自ら耕すような地主であったようである。祖父が生員となって以来読書人の生活をするようになったようである。一八八九年広東省の郷試に合格し一七歳で挙人となった。次の年の会試に失敗してから同郷の康有為（広東省南海県の人）の門人になった。以後康有為の協力者として政治行動を共にする。九六年上海で『事務報』の創刊に主筆としてかわり、二六歳の時一八九八年六月光緒帝の戊戌変法が開始されると京師大学堂訳書局の任務に就き、政権を助けた。同年九月の西太后のクーデターに際して日本公使館に避難し日本に亡命する。一家はマカオに逃れ、妻は翌年東京に至った。梁思成はこうして一九〇一年東京に生まれた。亡命中の梁啓超は華僑の協力を得て新聞を発行するなど政治活動をしており、梁思成誕生時は活動資金集めの

ためオーストラリアに行っていたようである。梁思成が一九五八年に周恩来から康有為生誕一〇〇年に何かするかと聞かれ、康梁についてなんら研究をしているわけではなく考えはないと答えている^(八)。当時の政治情勢もあるにせよ、亡命中の康有為と梁啓超の一家は家族ぐるみの親交があったわけではないらしい。一九一二年辛亥革命の後一〇月に中国に帰国する。袁世凱政権下司法総長などに就き、参政となった。欧米歴訪などを経て二〇年に帰国すると完全に政界から引退し教育活動に専念した。清華学校（現清華大学）などで教えたほか北京図書館長を務め多くの著述をなした。梁啓超の思想はスペンサー流の社会進化論とルソーの天賦民権論にもとづいて政論、哲学等を論じたとされる。本稿の観点からすると、スペンサー主義自由競争の単位となる民族に重きを置いていた人物であることに注目しておきたい。「民族」は、梁啓超がnationの翻訳語として日本語経由で中国語に取り入れたものとされる。また日本の近代化の過程に強い関心を抱き、倣おうとしていた。

さて梁思成の人生に戻る。生母の李蕙仙の兄は清朝高官（礼部尚書）であり、貴州出身といっても北京育ちである。日本時代に自転車に乗ることを覚えたというエピソードが伝えられている^(九)。これは時代が明治末年に当たることを考えると、大変興味深い。後に梁思成夫妻がアメリカ留学から帰国する際に、夫妻でヨーロッパを見学する計画を変更して林徽因が先に帰国しようとしたところ、梁啓超から手紙で諭され林徽因も同行することになるが、梁啓超の女子教育観を考える上で興味深い。また中国の伝統として梁啓超には第二夫人王桂荃がいた。王桂荃は正夫人の李蕙仙が親戚を当たって聡明勤勉な女性を連れてきたものという。梁啓超亡命後来日同居している。梁思成兄弟は李蕙仙を「媽」、王桂荃を「娘」（いずれもお母さんの意味）と呼んでいたという。幼年期の梁思成は第二夫人になついている。梁啓超一家は、家族が多いため一華僑が提供してくれた神戸郊外の須磨にある別荘に転居する。この別荘を双濤園と名づけている。この時期に触れた日本の古建築として法隆寺を訪ねたことに言及している。梁

思成の年譜を見ると、日本時代に横浜の大同学校幼稚園、神戸同文学校初小に学んでいる。

(二) 清華学校と学生時代

一九一二年に梁思成は家族とともに帰国する。まず天津に住し、北京に移る。北京匯文学校および崇徳高小に転じた。一四年に梁啓超が清華学校に招かれ、学校内の住宅に移る。梁思成は一五年に清華学校に入学する。

清華学校は、現在の清華大学であり、ノーベル賞受賞者を含む研究者や朱鎔基・胡錦濤のような政治リーダーを輩出する中国有数の名門大学である。^(十) 清華大学は一九一一年清朝政府により留美予備学校(アメリカ留学予備学校)として北京西郊の清華園に設立、一二年に清華学校と改称、二五年に大学部を設置し二八年に国立清華大学と改称した。二八年の時点で文、法、理、工の四つの学部を有する総合大学である。日中戦争時期の疎開を経て今日に至る。^(十一) 清華学校の設立資金はアメリカ政府が得た義和団事件賠償金によるものである。これは日本の東京大学の東洋文化研究所と京都大学の人文科学研究所の起源が、義和団事件賠償金による東方文化事業の一環として設立された機関にあることと似ているともいえる。この沿革からも予想されるように清華大学はアメリカとのつながりが強く、清華大学からアメリカ留学という典型的なエリートコースがあった。梁思成もこの典型的エリートである。中国近代知識人がアメリカ留学組と日本留学組に二分され、梁思成はアメリカ組の代表格であり、日本への反発につながっていく。^(十二)

梁思成は一九一五年の入学から二三年に清華学校を離れるまで八年間在学した。この間、一九年に五四運動では清華学生のリーダーの一人で「愛国十人団」と義勇軍の中堅分子であったという。父梁啓超は子女の教育に当たり、清華学校で西洋学術を学ばせる一方休暇には自ら国学を講じ、中国の学術とのバランスを取らせたという。^(十三) 卒業試

験と留学の準備中の二三年五月天安門広場の「国恥記念日」行事に参加途中、弟の梁思永とともに乗っていたオートバイが事故に遭い、大怪我をして協和病院に入院した。このため留学が同級生よりも一年遅れた。また年譜に「卒業」の表現がないこともこのことによる。梁思成がなぜ建築学を志したのか明確なことはわからないが、この入院中に父からこの機会に国学を身につけるよう言われて読書し、建築史を研究する基礎が出来たと述べている。^(十四)

(三) 留学と欧米体験

一九二四年に梁思成は林徽因とともにアメリカのペンシルベニア大学に入学するため渡米した。理想のカップルとされるこの二人の父親が友人同士で、結婚させる前提で二人を会わせた。ところが林徽因が現代女性過ぎること
で母の李蕙仙が結婚に反対であった。婚約中の二人の親密さに激怒した母が結婚に猛反対したため、二人が実際に結婚したのは母が亡くなってずっと後のことでカナダで結婚式を挙げている。^(十五) 前述のように李蕙仙は自転車を乗り回す活発さがある一方で第二夫人を選んだり林徽因に拒否感を持つなど伝統的価値観を示す存在でもあったようである。

一九二五年に父から古籍の復刻版で『营造法式』^(十六)が送られてきた。これは北宋の官訂を受けた建築設計と施工の専門書である。梁思成が英語で発表して有名になるのも最晩年に取り組むのもこの書の注釈や図解である。父梁啓超が息子の研究の内容にまで深くかかわっていることに注目しておきたい。建築は伝統的に読書階級のなすことではなく職人の口伝によって伝えられる。したがって知識人が文章に残すことは稀でそこに梁思成は注目したのである。ペンシルベニア大学卒業後ハーバード大学に学び、博士論文の『中国宮室史』の準備にかかる。帰国後史料を収集して二年後に提出したと自身が語っている。

(四) 营造学社を中心とした古建築調査

中国への帰国時半年のヨーロッパ見聞をする。これについても梁啓超は細かく見るべきものを指示している。英国からスウェーデン、ドイツで中世都市（アルトシュタット）、スイス、イタリアでルネサンスのあと、フランス、スペインではアルハンブラ宮殿、トルコなども行っている。ヨーロッパ見学の計画は未完であったが、父梁啓超の病気が重いという電報に接してシベリア鉄道経由で帰国する。

帰国途中瀋陽に到着した梁思成を清華学校の先輩の高惜氷が待ち構えており、自分が工学院院长をしている東北大学の建築系主任として教えるように誘った。ここでも梁啓超の意向が働いており、張学良が父の後を継いだ東北で進取の精神があつてさまざまなことが出来ること、中国建築史の研究の時間が取れることなどの指摘を受け、着任した。二七歳で学科の責任者となり、夫婦で学科を支えていた。^(十七)

朱啓鈴という人物が『营造法式』の抄本を発見刊行し、自らの資金で营造学社を設立し中国古建築を研究する学術団体を創った。研究資金の補助を受ける中で関係者が同団体に現代建築の専門家がいな^(十八)いことで建築史に関心のある梁思成を誘った。梁思成は妻の病氣、日本の侵略などで北京に移る決心をし、一九三二年に营造学社に入る。^(十八)このときから一九三七年八月に盧溝橋事件から日中戦争が始まり、北平（北京）の营造学社が解散するまでもっとも精力的に古建築の調査研究を行う時期である。妻の林徽因とともに古建築、古美術を調査して廻る姿が写真にも残されている。

まず河北省薊県の独樂寺が遼代の建築であることを発見する。また同じく宝坻県の西大寺（広濟寺）にも遼代の構造を発見する。ついで正定県、一九三三年には山西省の調査に着手する。大同の南北朝期の仏教遺跡、大同近郊の雲崗石窟など。応県の本塔は従来清代の再建と見られていたが、偶々写真を見て急遽調査に向かい、一〇五六年

の遼代の建物であることを発見する。高さ六六メートルの巨大な木塔で、中国最古の木塔とされている。この時には発見に大変興奮している様子である。^(十九)また河北の趙県の趙州橋（安濟橋）が隋代に建造された最古の石橋であることを突き止めるなどしている。また北京においても故宮の実測調査などを行っている。このように当時公共交通や宿泊の便が極めて貧弱な中で、河北はもとより山西省、浙江省、江蘇省、河南省、陝西省などに精力的に調査している。こうした行動の背景に、中国の伝統建築の調査が日本人によって着手されている現状に中国人として対抗しようという意識があったようである。たとえば雲崗石窟は一九〇二年に伊東忠太によって重要性が指摘されてから注目を集めているし、また関野貞は精力的に中国古建築を研究した。梁思成は後に関野貞の研究を正しもしている。^(二十)また日本人研究者がかつて中国に唐代の木造建築は残存しないと断言したことを反証しようとしていたようである。^(二十一)一九三七年に五台山の仏光寺大殿の梁に唐大中一一（八五七）年の墨書があることを苦勞の未確認している。なにより日中戦争の激化で古建築が失われるのを恐れ調査に没頭していた。日中戦争勃発に伴って營造学社が解散したが、この間の調査資料の散逸を恐れ、天津のイギリス租界内のイギリス系銀行に預けた。ところが一九四一年水害のためこの資料が失われてしまった。^(二十二)

北京を離れて昆明に落ち着く。そこで營造学社を再建し研究を続ける。一九四〇年に中央研究院歴史語言研究所は四川省南溪県李庄に移ることを決定し、その図書資料に頼っている營造学社とともに李庄に移った。李庄は四川南部の長江に臨むところにあるが、気候が悪く医療も不十分で林徽因の健康にはよくなかったようである。

一九三九年に梁思成は中央博物院の建築史料編纂委員会主任となり、『中国建築史』の編集を四二年に開始し、四四年に完成している。英文版も作成したが原稿が失われ、後妻の林洙が奔走して発見し一九八四年にアメリカで刊行されたという。

(五) 戦後の活躍

一九四五年の日中戦争終結後早い時期に梁思成は海外での活動を開始する。四六年にエール大学とプリンストン大学からの招請があり、戦後アメリカの建築教育考察のため渡米している。引き続き国連本部の設計顧問団の一員となっている。こうした情勢の中で一家は北平に帰っている。どのようにして帰還したのかよくわからない。四六年には清華大学の建築系の創設に着手している。

日中戦争終結とともに国共内戦は激しくなる。北京は一九四八年一二月までに平和的に解放の話し合いが付き、四九年一月三十一日共産軍が入城する。しかし情勢は緊迫していたようである。ある日の夜、張奚若が二名の解放軍の軍人を連れてやってきて、国民軍の傅作義將軍が和平に応じない場合戦闘になるが、歴史的文物を保護するため砲撃をしてはならない文物はどれかと軍用地図を出して聞いたという。^(二十三) 解放後北京の建築面について中央の指導者は梁思成に意見を聞いている。また懐仁堂の改築に当たって梁思成が指導する清華大学営建系の教師が完成させている。中南海の懐仁堂は、共産党の中国が全国を掌握するに当たり、北京に会議場が少なく政治協商会議開催のために改築を行ったものである。^(二十四)

三 共産党政権の民族表象政策と梁思成

梁思成が第二次世界大戦後いち早くアメリカにわたり、国連の専門家集団に中国代表として加わるのは、言うまでも無く国民政府の代表としてである。それが共産党政府の下の北京（北平）にどのようにしてとどまったのか、何らかの逡巡があったのかを示す資料はない。もちろんいち早く清華大学付近は解放され大学の雰囲気も共産軍を

歓迎する空気もあつたこともある。しかし何より歴史文物の宝庫である北京で、共産党が示した歴史文物の保護に寄せるこのような態度が期待を抱かせたであろうことは想像に難くない。

北京解放後、梁思成はさまざまな国家建設事業にかかわる。まず国徽の設計を行う。^(二十五) 国徽は天安門を図案化したものであるが、これには梁思成と林徽因がかかわっている。稲穂や齒車などソビエトを象徴する抽象的図案もあつたが、中国の民族の個性を出すべきであるとして歴史文物である天安門を図案化したものが採用されている。また天安門広場に人民英雄記念碑のデザインにもかかわり、建設委員会は委員長が彭真で副主任が鄭振鐸と梁思成となつている。

一九四九年五月に梁思成は北平都市計画委員会副主任となつている。城壁を保存して歴史的都市構造を維持し、故宮などの歴史文物を保存する。北京西郊に新市街を建設し官庁を集中させるという構想である。梁思成にとつて北京は世界最長最大の南北中軸線を有する都市で中国のみならず世界的に見ても歴史文物建築のもつとも多い都市である。「宏偉壮麗な配置」、「中華民族建築の伝統手法と都市計画の知恵と気魄の現れ」^(二十六)と北京を評している。このように梁思成は、民族的伝統が共産党政権下で主張実現できるものと考えていたようである。解放後中国初期の特徴は何と言つてもソビエト連邦との蜜月関係であり、各方面へのソ連専門家顧問の派遣である。中国の都市計画は第一次五カ年計画に本格化するが、これはソ連専門家が大いに活躍する。ソ連は長いソ連包囲や独ソ戦の経験から生産力の分散の国土計画を進めた経緯があり、個々の都市についても独立した工業生産力を持った完結性のある都市を目指す傾向がある。^(二十七) 地方の都市のみならず北京についても、一定の工業生産力を有する都市にするというソ連専門家の意見が強くなる。

建築についてソ連専門家は「民族的形式、社会主義的内容」というソ連建築理論を持ち込む。これに呼応するよ

うに梁思成は民族形式を唱導する。これの陳腐化したものが「大屋根（大屋頂）」であった。この点について林洙は次のように指摘している。ほとんどの人が梁思成と聞いて笑いながら「大屋根」を想起する。しかし梁思成自身は生涯に一度も大屋根建築の設計をしたことはなく、擬古建築を設計したこともない。唯一揚州の鑑真記念堂を建築したが、これは日本の唐招提寺の建築に倣った物で擬古建築ではない、^(二十八)という。大屋根とは建物に瓦屋根を載せた形になり、これが後に屋根の建築費の分だけ余計に費用がかかり経済資源を無駄にすると批判されてゆく。その矢面に立つのが梁思成である。

ところでこの大屋根は日本の帝冠様式を髣髴とさせる。こうして考えると、少なくとも梁思成の経歴や教育を見る限り、日本の影響は受けていない。梁思成の日本体験は関西を中心とした幼少期のものであり、教育は基本的にアメリカのものである。父梁啓超が日本の民族主義に倣って中国の民族主義を育てようとした側面はあるが、あくまで中国自体が問題であって日本への関心は副次的なものである。梁思成に関する限り、民族形式と帝冠様式の間に関係があるとは思えない。にもかかわらず東アジアでナショナルなものを追求すると似た形になってしまう点が興味深い。

一九五四―五五年に梁思成が先導した民族形式は「復古主義」として批判されてゆく。天安門の保存の主張が復古主義として批判されてゆく。前記大屋根もこうした中で登場する。当然これに続く反右派闘争の批判にさらされるところであるが、このときは批判を回避している。^(二十九)

一九六六年に文化大革命が始まる。当時大字報に書かれたものを妻の林洙が記録し続けている。「封建社会の遺物である北京の城壁撤去に狂ったように反対した。封建社会に恋々とし、ブルジョア階級の教育路線を堅持して青年に害毒を流す。解放前夜にアメリカで講義し文化のブローカーとなった。中国古建築を売り出しブルジョア教学

制度を仕入れて^(三十一)いる。」等である。数少ない具体的非難は、城壁や門などの古建築の保存を主張したことが封建制を懐かしむブルジョア主義とされていることである。四大問題という大字報には、「一、フランス建築家代表団接待時に女性団長の頬にキスし民族的尊厳を喪失した、二、国連本部設計顧問になった、三、国民党の戦区文物保存委員会の副主任になった、四、狂ったように毛主席の都市建設指示に反対した^(三十二)」とあったそうである。

四 おわりに――ナショナリズムと都市空間を考えるために

梁思成の功績は何なのか、まず第一に一九四八年に解放軍代表が梁思成に接触すると直ちに国共内戦中の文物保護に役立てるため、「全国重要文物建築簡目」を作成して渡している。これが一九六一年の國務院公布「第一批全国重要文物保護單位の名单」と「文物保護管理暫行条例」に結実する^(三十二)。文化財保護行政の基礎を作った。

第二に建築思想としては民族形式の名の下に伝統建築の营造法式を取り入れた建築や都市構造を志向することになる。これが中国特有のナショナリズムの都市および建築の様式となる。都市とナショナリズムについては以前簡単に触れた^(三十三)。中国のナショナリズムは漢族ナショナリズムが近代に中華ナショナリズムへと展開する。この過程で梁啓超、梁思成親子は重要な役割を果たす。中国の民族伝統について梁思成の考えを示すと思われる興味深い箇所がある。それは学生に対し、雲崗の石窟について「中国固有の芸術の中に外来影響が混入した好事例であり、この種の民族文化の交流によって文化の生命力が生まれる^(三十四)」、と述べていることである。梁思成は民族伝統に漢族伝統のみでなく異民族の要素が混入することを重視しており、後の中華民族の伝統の考察を思わせるものがある。

第三に教育体制整備である。戦後アメリカの建築教育視察を経て、清華大学の教育制度を改革する。営建系の下

に建築学と都市計画の二つの専攻を置く。中国で都市計画専門の専攻をはじめて置いたことになる。梁思成は「体形環境 (physical environmentの翻訳)」という表現で建築単体で見ることの限界を教育している。^(三十五)

しかし梁思成の行動を見ていて都市計画についてどのように考えていたのか不明な点がある。中軸線の強調など古典的な空間設計の概念は今日の中国でも相当に意識されている発想である。^(三十六)しかし近代の都市計画で当然のように考える道路、水道、下水などの都市基盤、都市計画区域の概念、計画人口と都市規模のコントロール、ゾーニングなど都市全体のコントロールへの言及はほとんど感じられない。梁思成は建築家に「哲学的頭脳、社会学的眼光、技術者の正確さ、心理学的敏感さ、文学的洞察力」が必要であると語っていたようであるが、古典的空間概念とどう整合するのか明確にしていない。解放後の北京は上海などとともに急激な人口流入にさらされ、結局都市計画でなく戸籍を用いて公安による人口管理を行うこと^(三十七)によって都市問題の深刻化を防いだ。梁思成が言う分区もゾーニングとは似て非なるものである。梁思成がアメリカで教育を受け、戦争の中断はあるにしても戦後のアメリカも見てきているだけに何か欠けているように思われる。そしてこのことが、古典建築の保存の功績は認めて余りあるものの、伝統社会重視の批判を招いてしまったのかもしれない。そしてまもなく政治の嵐によってそもそも都市計画自体存在しない状況が生まれるのである。

政治の嵐を潜り抜けて、中国が経済的自信を回復した今日、また伝統的な空間概念を復活させようという動きが各所に見られる。たとえば近年の国家イベントのセレモニーを次々に行う中華世紀壇は、梁思成が研究に力を注いだ壇という建築形式や中軸線という伝統要素をふんだんに盛り込んだ施設である。もちろんこれら要素は梁思成が発明したものでない。梁思成が研究に専念した隠れた伝統だけに、根強く復活を繰り返すものである。

本稿は梁思成が中華ナショナリズムの空間表現を見てゆく上で重要な位置を占める人物であるとの認識の下に梁思成の人生を見てみた。そのナショナリズムへの意義を考えるには不十分な考察であるが今後の課題としたい。

- 一 村松伸「建築家たちの夢と挫折—アジアの近代建築を歩く①北京 梁思成—「中国建築」を創る」『月刊しにか』一二(四)、二〇〇一
- 〇五 名和又介「北京再建と梁思成—建国当初から反右派闘争まで」『言語文化』(同志社大学言語文化学会) 八(一)、二〇〇五
- 二 西川真子「民国時期中国知識人夫婦における『知』の共有—梁思成と林徽因」『名古屋外国語大学外国語学部紀要二三号』二〇〇二
- 三 紺野大介『中国の頭脳 清華大学と北京大学』朝日新聞社二〇〇六、二九—三〇頁
- 四 林洙『困惑の大匠 梁思成』(第二版) 山東画報出版社二〇〇一、序言の日付は一九九五年二月。なおほぼ同じ内容であるが、同「開拓者の足跡—梁思成的一生」楊永生・明連生編『建築四傑』中国建筑工業出版社一九九八参照。
- 五 林洙二〇〇一、三頁による。丁文江・趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編(第二卷)』岩波書店二〇〇四、一二六頁、虹南(思成)の誕生日は三月二日となっているが、これは民国前、宣統三(一九一一)年までを陰暦(太陰太陽暦)で表記したためである。
- 六 同書三—四頁
- 七 梁啓超に関する著述はきわめて多い。ここでは事典的記述(平凡社版『世界大百科事典』等)に『梁啓超年譜長編』(全五卷)等により補足して記述した。
- 八 林洙前掲書六頁
- 九 同書七頁

十 紺野大介著前掲書参照

十一 清華大学ホームページによる。http://www.tsinghua.edu.cn/

十二 村松伸、前掲論文一〇七頁

十三 林洙、前掲書一八頁、国学として『国学源流』『孟子』『墨子』『前清一代學術』などを講じたという。

十四 同書一九頁

十五 同書一九頁、また二三頁に父から結婚問題を託された義兄がカナダ領事をしていたため、一九二八年にカナダのオタワで結婚した旨記されている。

十六 同書二三頁

十七 同書二八―二九頁

十八 同書三一―三三頁

十九 同書四八―五〇頁

二十 関野は明治期に奈良県に赴任し古寺社の保存に功績のあった建築史家で東京帝国大学工学部助教授などを歴任した。

関野は中国の古建築の研究にも携わっている。これは河北正定県の隆興寺で関野が建築様式から清代のものとした建築を宋代までさかのぼるものとし、ずっと後の一九五四年に至り解体修理の際に元代の遺構が含まれることを明らかにした。

二十一 林洙前掲書六一頁

二十二 同書七五頁、梁再冰の回顧による。

二十三 同書一一二頁。張奚若は政治学者・清華大学教授、中共北京市委党史研究室編『中共北京党史人物伝(第二卷)』中共党史出版社一九九四、二七四―二八八頁「張奚若」参照。

二十四 拙稿「北京の都市改造とその理念および制度―社会主義都市における計画から市場へ」駿河台法学二二(一)(二)一九九九、八七頁

二十五 林洙前掲書一一四頁、秦佑国「梁思成、林徽因与国徽設計」『建築史論文集（第一輯）』（清華大学出版社）一九九九、によると一九四九年六月に政治協商會議において国旗、国徽、国歌、紀年、国都などの原案作成を任務とする作業部会が設けられている。

二十六 林洙前掲書一三五頁

二十七 汪德華『中国城市规划史綱』東南大学出版社二〇〇五に各五カ年計画と都市計画の関係について詳しい。

二十八 林洙前掲書一四〇—一四一頁

二十九 名和又介前掲論文二三頁参照

三十 林洙前掲書二二二頁

三十一 同書二三五頁

三十二 同書二二八頁

三十三 拙稿「中華ナシヨナリズムの起源」『比較法文化』（駿河台大学）一五、二〇〇七

三十四 林洙前掲書四七頁

三十五 林洙前掲書九四頁、また当時の教え子の呉良鏞も当時の教育を回顧してこの点を強調している。呉良鏞「清華建築系的回顧与前瞻」『城市规划設計論集』北京燕山出版社一九八八

三十六 拙稿「中国の都市建設—北京の空間構造にみる伝統主義、社会主義、市場経済の各要素について」『日本都市学会年報』三三、二〇〇〇、中軸線やシンメトリックな空間構造など都市のマクロデザインでは十分に考えられ、あるいは文化的に当たり前のものとして採用されている。中軸線の歴史と現代における採用については北京市計画委員会『北京中軸線都市設計』機械工業出版社二〇〇五に詳しい。

三十七 林洙前掲書九二頁

付録

* 梁思成年表

- 一九〇一年四月二〇日 日本・東京に生まれる（祖籍広東省新会県）
- 一九〇六―一九二二年 日本・横浜大同学校幼稚園、神戸同文学校初小
父母に従い帰国
- 一九一二年 北京匯文学校及び崇徳学校高小
清華学校
- 一九一五―二三年 清華学校
清華大学王国維先生記念碑を設計する
- 一九一九年 交通事故による怪我のため一年休養する
- 一九二三―一九二四年 林徽因とともにアメリカ・ペンシルベニア大学建築学系に行く
- 一九二四年六月 母李蕙仙癌のため病死
- 一九二五年一二月二二日 岳父林長民、張作霖ため郭松林の役にて死す
- 一九二七年六月 ペンシルベニア大学建築系を卒業、修士の学位を得る
- 一九二七年六―八月 アメリカファイラデルフィア・ポール・クレット事務所にて働く
- 一九二七年九月―一九二八年二月 アメリカ・ハーバード大学大学院
- 一九二八年三月 林徽因とカナダ・オタワにて結婚
- 一九二八年三―九月 林徽因とともにヨーロッパに行き、古建築、現代建築を見学
- 一九二八年九月―一九三一年六月 帰国、東北大学建築学科創設に当たり主任

- 一九二九年一月二十九日 父梁啓超医療事故のため死去
- 一九三〇年 娘の梁再冰生まれる
- 一九三〇年 林徽因結核を再発、北京に帰り香山にて療養
- 一九三〇年 陳植、童騫、蔡方蔭とともに吉林大学講堂図書館を設計
- 一九三一年九月―一九三七年八月 中国营造学社法式部主任
- 一九三二年春 河北薊県独楽寺を調査
- 一九三二年六月 河北宝坻県広濟寺三大士殿の調査
- 一九三二年 国民政府中央研究院歴史語言通信研究員
- 一九三二年 息子の梁從誠生まれる
- 一九三二年 北京仁立絨毯会社のデザイン
- 一九三三―一九三三年 北京大学教授、中国建築史を講義
- 一九三三―一九三四年 清華大学教授兼任、建築学を講義
- 一九三三年三月 河北正定県隆興寺及び正定古建築を調査
- 一九三三年九月 山西大同上下華嚴寺、善化寺、雲崗石窟など調査
- 一九三三年九月 山西応県木塔、渾源県懸空寺を調査
- 一九三三年十一月 河北趙県趙州橋（安濟橋）を調査
- 一九三四年 中央古物保存委員会委員
- 一九三四年 北京大学地質館を設計

- 一九三四年八月
山西晋中地区十三県の古建築を調査
- 一九三四年一〇月
浙江六県の古建築を調査
- 一九三五年二月
曲阜孔子廟建築の考察と修繕計画を立てる
- 一九三五年
北京大学女子宿舎を設計
- 一九三六年春
龍門石窟および山東中部一九県の古建築を調査
- 一九三六年冬
山西陝西省十九県の古建築を調査
- 一九三七年六月
陝西山西省十四県の古建築を調査、山西五台山仏光寺が唐代建築であると鑑
定する
- 一九三七年八月
抗日戦争勃発、北平の中国营造学社解散
- 一九三八―一九四五年
昆明にて中国营造学社再建、一九四〇年中央研究院が四川南溪李庄に移転す
るに従う
- 一九三九―一九四五年
四川省古物保存委員会委員、国立中央博物館中国建築史料編纂委員会主任
- 一九三九年八月―一九四〇年二月
西南三十六県の古建築、漢闕、漢崖墓、摩崖石刻などの調査
- 一九四〇年
重慶にて中央大学の「中国伝統建築の発展および特点」シリーズ講座を行う
- 一九四一―一九四五年
古籍『营造法式』の研究に集中、法式の大部分の図解作業が完成
- 一九四三―一九四四年
『中国建築史』および英文版『中国建築史図録』を著す
- 一九四四年冬―一九四六年
重慶政府教育部戦区文物保存委員会副主任
- 一九四五年
中国营造学社結末

- 一九四六年—一九七二年 清華大学建築学部創設に当たり学部長
- 一九四六年一〇月—一九四七年八月 アメリカに赴きアメリカ現代建築教育の考察、エール大学にて講義
- 一九四七年二月—一九四七年八月 国連本部設計建築顧問団中国政府代表
- 一九四七年四月 アメリカプリンストン大学名誉文学博士授与
- 一九四七年九月 アメリカより帰国
- 一九四八年九月 南京政府中央研究院院士となる
- 一九四九年 中南海懷仁堂の改築を指導
- 一九四九—一九五〇年 清華大学営建系の国徽デザイングループに参加指導、中華人民共和国の国徽デザイン完成
- 一九四九—一九七二年 全国政治協商委員会委員（第一次特別招請代表）
- 一九四九年五月—一九七二年 北京市都市計画委員会（後に都市建設委員会と改称）副主任
- 一九四九年一月 北京市各次人民代表会議代表および主席団メンバー
- 一九四九年九月—一九六四年一月 北京市人民政府委員会委員
- 一九五一年 任弼時同志の墓および墓碑の設計
- 一九五二年八月—一九六四年一月 北京市政治協商会議副主席
- 一九五二年 北京天安門広場人民英雄記念碑建築設計責任者
- 一九五二年 中国建築学会創設準備開始、中国建築学会の主要設立準備員
- 一九五三年九月—一九七二年 中国建築学会第一、二、三、四次副理事長、ならびに一、二、三次理事会に

一九五三—一九七二年

における作業報告大会挨拶、北京市土木建築学会理事長

中国民主同盟加入

一九五三年

中国美術家協会理事当選、全国文連第二次委員当選

一九五三年—五月

中国科学院訪ソ代表団に参加しソ連訪問

一九五三—一九五四年

中国建築科学の第一の学術刊行物である『建築学報』の創刊に加わる。同誌主編となる。

一九五四年三月

人民義勇軍に対する中国人民慰問団副団長として朝鮮を訪問する。

一九五四年八月—一九六四年一二月

北京市人民代表大会代表

一九五四年九月—一九七二年

全国人民代表大会第一、二、三次代表に当選

一九五五年二月

武漢長江大橋技術顧問委員会委員

一九五五年二月—一九五六年一月

「梁思成は代表的ブルジョア階級唯美主義的復古主義建築思想である」との批判を受ける。

一九五五年四月

妻林徽因病死

一九五五年四月—一九七二年

中国科学院技術科学部委員（現在院士と改称）

一九五五—一九七二年

国家科委建築組副組長

一九五六年三月

十二年科学長期計画に参加

一九五六年—一九七二年

中国民主同盟中央常務委員に当選

一九五六—一九七二年

建工部建築科学研究院建築理論および歴史研究室主任

- 一九五六年六月—八月
中国建築家ポーランド訪問代表团に参加、副団長、ベルリンにおける民主国家建設協会主席秘書長会議に出席
- 一九五八年三月
チェコスロバキアにて開催の国際建協（国際建築家連合UIA Ⅱ 訳注）都市計画報告会議に出席
- 一九五八年七月
モスクワにて開催の国際建協第五回大会にて「東アジア各国の一九四五—一九五七年の都市建設と改造」の報告をする。
- 一九五八年八月
中国建築家代表团チェコ訪問に参加
- 一九五九年一月—一九六四年十二月
全国政治協商会議常務委員に当選
- 一九五九年一月
中国共産党入党
- 一九五九年五月
ストックホルムにて開催の世界和平理事会特別会議出席
- 一九六〇年八月
全国文芸界連合会第三次全国委員会委員に当選
- 一九六二年
林洙と結婚
- 一九六三年九月
キューバ、ハバナで開催の国際建協第七回大会および青年教師会に出席、副団長
- 一九六三年
メキシコ開催の国際建協の第八回会議出席、中国代表团副団長
- 一九六三年
中国建築家代表团ブラジル訪問に参加、副団長
- 一九六三年七月
全国科学技術普及協会北京分会副会長
- 一九六四年八月
北京科学討論会（国際会議）特別招請代表

一九六四—一九七二年

第三次全国代表大会常務委員に当選

一九六五年

フランス、パリ開催の国際建協第八回、第九回大会代表会議に出席、代表団
団長

一九六六年六月

『营造法式注釈』執筆完成

一九六六年六月—一九七二年

文化大革命中に批判を受け、一九七一年に正式に「反動學術權威」とされる。

一九七一年

中国共産党党籍回復

一九七二年一月九日

北京にて病死

* 林洙『困惑的大匠 梁思成』山東画報出版社二〇〇一、「梁思成生平年表」(卷末)の翻訳である。